

自然保護運動における環境認識

Development of environmentalists' awareness in post-war Japan

杉谷 隆 Takashi SUGITANI

環境認識 environmental awareness とは、「自然をどう評価するか；どうあるべきと思うか」という人々の価値観を指す。これは、人の立場によって異なるし、思潮として時代的にも変化する。本研究は、高度経済成長期以降の現代日本において、市民による自然保護運動の背景となった環境認識を、以下の4つの事例を通して検討した。

- 1) 福井県大野盆地の地下水保全運動 (1970年代～)
- 2) 千葉県三芳村の旧農用林の保存運動 (1988～1994年)
- 3) 渡良瀬遊水池のアシ原生生態系の保全運動 (1988年～)
- 4) 香川県庁が主導する旧農用林の保全運動 (1994年～)

これらの運動の保護対象は、隔絶地域の原生林のような原生自然 wilderness ではなく、人手が加わった自然物である。研究手法としては、現地における地形・植生などの現況調査、運動家や一般市民への聞き取り、参与観察、質問票調査、および文献資料調査を行った。

大野盆地では、高度経済成長末期の1960年代末から、市街地の家庭浅井戸が枯渇しはじめた。大野市は、繊維工場での節水を要請し一般家庭での地下水融雪を禁止したが、効果は上がらず、上水道建設にいたった。市民運動家らは地下水保全を主張したが、普遍的な共感を得られなかった。市街地住民は、運動家らも含めて、地下水位の低下にあわせて井戸掘り競争を続けた。地下水は、自然環境というよりも自然資源と認識され、争奪の対象となった。

三芳村では、バブル景気下の1988年にゴルフ場開発計画が持ち上がり、それ以前の1973年から活動を続けていた有機農業・産直運動団体によって、反対運動が起こされた。運動は立木トラストの手法を採用して全国から支援を集め、開発計画は1994年に中止された。この運動家や立木購入者には、第二次世界大戦時から戦後のベビーブ

ームにかけて生まれた女性が多く、1970年代後半に消費者運動が盛んになったとき、家事、出産、子育てを通じて「環境感度」が高い時期にあった。立木購入者の環境認識の主流は、古典的な原生林保護思想だった。これは、開発予定地の多くの地権者が、旧農用林の雑木林が照葉樹林へ遷移することを嫌い開発を歓迎したことは、食い違っていた。購入者やマスメディアは、運動を1960年代的な農民闘争としても、また、1990年代の旧農用林保全運動としても支持していた。

渡良瀬遊水池は、足尾鉍毒事件の対策として1922年に造成され、その後アシ原と野生動物からなる湿地生態系が成立した。やはりバブル景気下の1988年に観光開発が始まったため、自然保護団体が広域的に連合して保護運動を起こした。運動家らは、人為的に出現した生態系に新たな価値を見だし、それを人為的に維持することを主張してきた。

香川県庁が1994年から実施している森林保全運動は、愛称を「どんぐり銀行」といい、行政主導型での新しい保全方法を提示している。森林保全を担っているのは中高年世代で、旧来のアカマツ林が枯死した後の、遷移途中相の落葉広葉樹林を維持しようとしている。この林地には、子供を含む一般市民が訪れて、グリーン・ツーリズムを楽しんでいる。

大野盆地、三芳村、渡良瀬遊水池、香川県の事例を通じて、その歴史的・社会運動的な性格と、保護運動の背景にある環境認識には関連があることがわかる。

大野盆地の地下水保全運動は、1970年代に成立し主婦を主体とした点では当時の消費者運動の盛り上がりにも重なっていたが、高度経済成長下の公害闘争の形式から脱却できず、運動の発展性も前向きの解決もなかった。地下水が資源でも環境でもある両義性が、原理的に拭いきれなかったのである。この困難さは、二酸化炭素排出規制がなかなか進まない現在もなお続いている。

三芳村のゴルフ場開発反対運動は、典型的に1970年代の消費者運動に基礎があり、かつバブル景気下の典型的な自然保護運動に発展した。しかし、関係者である地権者、消費者団体、有機農民、マスメディア、および立木購入者の間で、環境認識には相違が生じたし、公害闘争時からの反資本主義の基調をも遺していた。立木トラストという方法も、土地を買収するわけではないので、緊急発動的手段として認識された。この運動は1990年代初期の過渡的性格を有していた。

渡良瀬遊水池の保全運動でも、運動家らは三芳村の事例と同じく1970-80年代の活動経歴を持っていた。しかし、それが多岐にわたっていたことが運動の視野を広め、学術的な生態系保全という共通の目標で結束した点は、現代的といえる。その背景には、世界的な湿地保全運動の隆盛がある。しかし、バブル景気下での開発反対運動を経験しなければならなかった点では、この運動は初期型とみなされる。渡良瀬遊水池の周辺住民は、湿地やアシ原を無用ないし危険な場所と認識してきた。運動家らは、その価値観の逆転をはからねばならなかった点でも、初期型といえる。

香川県の「どんぐり銀行」は、従来の闘争的な自然保護運動からは、かなり断絶している。ただし、これに歴史的背景がないわけではなく、保全林地は自然への関心が高まった1970年代に買収されたし、保全作業には中高年のボランティアが多い。環境認識の点では、雑木林に対する正の価値観がある程度普及していたので、これを所与のものとすることができた。

現在、原生自然に加えて、人間の管理下にある二次的自然をも尊重する思潮が強くなってきた。1990年代には一般の人々も、生態学の植生遷移という一段高い動的レベルで自然を捉え、望ましい自然について議論ができるようになった。これは、科学思想史上、画期的な転換である。

初出誌一覧

Sugitani, T. 1998. Opposition movement against golf course development in Miyoshi Village, Chiba, Japan. *Geographical Review of Japan*, **71B**, 31-44.

Sugitani, T. 1999. Environmental awareness of the contributors to the national trust movement in Miyoshi Village, Chiba, Japan. *Geographical*

Review of Japan, **72B**, 48-62.

Sugitani, T. and Murata, K. 2000. Conservation movement of marsh ecosystem in Watarase Retarding Basin, Tochigi, Japan. *Ochanomizu University Studies in Arts and Culture*, **53**, 49-65.

Sugitani, T. 2000. Conservation movement of secondary forests in rural farming villages of Japan: its history, aspects and case studies. *Regional Views*, **13**, 1-14.

杉谷隆 2001. 福井県大野盆地の家庭浅井戸枯渇問題にみる住民の環境認識. *地学雑誌*, **110**, 339-354.

1986年東京大学大学院理学系研究科博士課程を単位取得退学し、東京大学教養学部助手。
1990年お茶の水女子大学講師、1991年助教授。

付記：自然・人文・社会にまたがるとりとめもない仕事をしたいと思い、しかし実力がはるかに及ばないと諦めたのは、筆者が学部4年生の時だった。実際に着手したのは、駒場の人文地理学教室で見習い修行をし、本学に仕官してからである。そして、1993年に『風景のなかの自然地理』（平井幸弘・松本淳氏と共著、古今書院）で突撃ラッパを吹き鳴らしたものの、深い泥濘に踏み込んでしまった。ここに1つの区切りがついて嬉しいと同時に、審査でいただいた批判を指針に再出発しなければならない。

この12年間はまた、地理学教室の人員刷新と改革の時期だった。以前の教室は、研究・教育・運営・資源管理の各面で座礁し、活力や正義は滞れかけていた。この難破船から水をかき出すのに現スタッフは必死だった。いまようやく吃水線が見えはじめ、学界へは独創的な貢献が増え、学内再編では開発・環境論やジェンダー論を含む市民科学で重きをなしてきたことも、大きな喜びである。本誌は前号から博論要旨の頁を設けたが、「3号企画」で終わらせまいよう、院生・修士生諸君とスタッフのたゆまぬ前進が必要である。

本学では、筆者は優れた指導学生に恵まれ、こちらが教わったものも多い。駒場を含む人文・社会系の同僚からも、技法や思考法を「盗んだ」。実務的には、1999年度は講義や教室運営から外してもらい、考える時間を持たせた。この場を借り、同志に厚くお礼を述べる。